

ボランティア活動の動機の検討

伊藤 忠 弘

個人の達成行動に従事する動機として「自分のため」か「周りの人のため」かという意識の違いに着目し、自己志向的動機と他者志向的動機という概念が提起され研究が進められている (e.g. 伊藤, 2004)。達成行動は一般的に、目標を自分で設定し、自律的に行動し、その結果も責任もすべて自分にあるという点で「自分のため」の行動である。そのため、周りの人の期待を内面化して達成行動に動機づけられるという一見他律的な他者志向的動機が、達成動機づけ研究において積極的に取り上げられることは少なかったと言えよう。しかし現実の達成行動を見渡してみると、達成行動に従事している者や優れたパフォーマンスを見せた者が、その原動力として自分の周囲の重要な他者からの思いや期待に言及することは決して珍しいことではない。

これに対して、ボランティア活動は個人の達成行動とは逆に、本来「他者のため」になされる行動である。しかし近年、ボランティア個人の生き甲斐や楽しみ、自己実現の観点からボランティアが論じられるようになり (広崎ら, 2006)、またボランティア活動がボランティア個人にもたらす様々な経験の効果が明らかにされ (妹尾・高木, 2003)、「自分のため」のボランティア活動という観点も取り上げられている。

そこで本論文では、最近 20 年間の日本で行われた実証的研究に注目し、ボランティア活動の動機について、「他者のため」という利他的動機と「自分のため」という利己的動機の枠組みでの整理を試みる。さらにこのような動機がボランティア活動を継続していくなかで変遷していく可能性について検討を行う。最後にボランティア活動の動機と達成行動における他者志向的

動機の類似点について考察を行う。

1. 援助行動の動機

これまでボランティア活動は、その要件として「自発性」、「無償性」、「公共性」といった特徴が挙げられてきた。個人的な関係を持たない見ず知らずの他者のために、強制されなくても自分の意志で、見返りを求めずに行う行為と定義される。しかし実際のボランティア活動では、「自発性」の原則に反して小中学校の学校教育のなかで半ば「強制的に」経験させられたり(柴田ら, 2004)、「無償性」の原則に反して何らかの報酬が支払われる「有償ボランティア」が広く受け入れられたりしている。

また福祉ボランティア、スポーツボランティア、環境ボランティア、災害ボランティアなど、その対象も多岐にわたっている。このように様々な分野で様々な形態でボランティア活動が行われていることを踏まえると、「他者のため」という動機だけでボランティア個人が活動していると単純に考えることはできないであろう。

ボランティア活動は心理学的観点からは「援助行動」の1つの形態と見なすことができる。援助行動の初期の研究は、Latané & Darley (1970) の「傍観者効果」の研究に代表されるように、他者の存在といった状況要因によって援助行動が妨害されたり促進されたりすることを明らかにした。この見方は、たとえ人が「性善説」が仮定するような「よい動機」を持っていたとしても、周囲の状況によってそれが必ずしも援助行動に結びつかないことを示唆している。

一方で進化心理学は進化生物学の知見をヒトにまで拡張して、遺伝子の再生産という観点から人間の行動を説明しようとする。「血縁淘汰」や「互恵的利他性」といった概念は、動物の一見利他的に見える行動が、自らの遺伝子の複製を作るために適応的に機能していると説明する。Dawkins (1976) が著した「利己的遺伝子 (selfish gene)」という本のタイトルは、まさにこの点を端的に表している。

援助行動を行いやすいパーソナリティや個人差変数についても研究が行われた。例えば援助行動を予測する特性として親和欲求や共感性が取り上げられている。人には、援助行動を積極的に行う「心優しい」人とそのような行動をしようとしなない「冷たい」人がいるというアプローチは素人目には受け入れやすい。しかし堀 (1991) は「報告された結果は必ずしも一貫性がみられないところがあり、明確に述べることはできにくい」とレビューしている。

C. ダニエル・バトソンは、なぜ人は利他的な行動をするのかという疑問を真っ正面から取り上げた心理学者である。彼の研究アプローチは、人はまず利己的に行動すると仮定して、利己的な動機で援助行動が生じるような要因をすべて取り除いても、それでもなおかつ人が利他的に振る舞うのであれば、純粋に利他的な動機が我々の中にあると考えることができるというものである。

バトソンは援助行動に至る「3パスモデル」を提起している。第1のパスは報酬獲得や罰を避けるという動機で援助行動が行われる経路である。報酬と罰にはそれぞれ物質的なもの (金銭的報酬や損失)、社会的なもの (他者からの承認や非難)、心理的なもの (自尊感情や罪悪感) が含まれる。第2のパスは他者の苦痛を目撃して生じた嫌悪的な喚起状態を下げるために援助行動が行われる経路である。この2つのパスの動機はバトソンによればいずれも利己的である。第3のパスは他者の状態に共感 (empathy) して援助行動を行う経路であり、バトソンはこの経路を真に利他的な動機に基づくと考えた。バトソンの一連の研究では、「他者の立場に身を置いてみる」という教示によって他者への共感を操作すると援助行動が増加することが明らかにされた。

現実の援助行動の動機を特定することは難しく、バトソンが指摘したように様々な利己的な動機も混在しうる。このため N. アイゼンバーグらは利他的行動 (altruistic behavior) を「他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする自発的な行為」と定義し、動機をその定義に含めていない (伊藤・平林, 1997)。

社会心理学の初期の研究では緊急事態における援助が扱われたが、その後日常的で継続的な援助行動も取り上げられた。竹村 (1991) は献血や臓器提供行動の理由とそれをしない人の理由を検討している。臓器提供はともかく献血は先の3つの要件から考えるとボランティア活動の1つと捉えることができるが、献血の理由としては、「自分の血液が役に立ってほしいから」という利他的と考えられる理由が最も多いが、それに続いて「将来自分や家族などが輸血を受けるときにそなえて」、「血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」といった必ずしも利他的とは言えない動機も挙げられることを指摘している。そしてパーソナリティ要因として、「する人」と「しない人」の間に一貫した差異を見いだすことは難しいとの結論に至っている。

2. ボランティアの動機

ボランティア活動を行う人の動機を扱った研究の主な方法は、①動機に関する複数の項目からなるリッカート法による尺度評定、②様々な動機に対応するカテゴリカルな選択肢のなかから1つもしくは複数を選択させる方法、③面接法、の3つである。①の評定法および②の選択法では、研究者が動機に関する項目ないし選択肢をあらかじめ用意する必要があり、因子分析の結果もあくまで研究者が想定した動機の分類に過ぎないという見方もある。このため結果の解釈には注意する必要があるが、ここでは尺度を用いた研究を中心にレビューし、ボランティア活動の動機の整理を試みる。

(1) VFI 尺度による研究

クラリーら (Clary et al., 1998) はボランティア活動がボランティアを行う人に対して果たす機能に着目し、①価値機能 (values)、②知識機能 (understanding)、③社会的機能 (social)、④経歴機能 (career)、⑤防衛機能 (protective)、⑥強化機能 (enhancement) の6つに分類している。そして個々人の各機能を測定するためのVFI尺度 (Volunteer Functions Inventory) を開発している。この尺度は各機能5項目ずつ、計30項目から成る (玉木, 2000)。

ここでの機能は個人がそのボランティア活動を行う動機と対応していると言える。利他的動機に近いものは、ボランティア活動によって自分の価値観や主義を表出する「価値機能」である。例えば、「私はそのグループに奉仕することに心から関心がある」や「私は、他者を助けることが重要であると考える」といった項目によって構成されており、ボランティア活動を個人の利他的な関心や価値観を表出したものと捉えている。一方、ボランティア活動が新しい経験や知識・技術の習得を可能にするとする「知識機能」や、経歴に箔をつけたり新しい仕事のチャンスを与えてくれるとする「経歴機能」は、実利的・現実的な報酬をボランティア活動から得ようとするという点で利己的動機に対応している。またボランティア活動に関心がある友人との関係を緊密にするという「社会適応機能」は、社会的な報酬を得ようとする動機と対応している。さらにボランティア行動をすることによって罪悪感や孤独感から逃れることができるなどとする「防衛機能」や、「ボランティアをすることは、私は必要とされていると感じさせる」、「ボランティアをすることは、自分自身をよりよく感じさせる」といった項目によって構成され、自己を強化するとされる「強化機能」は、心理的な報酬を得ようとする動機と対応している。

VFI 尺度は、桜井・桜井 (2000) (5 件法)、富重 (2002) (7 件法)、坂野・矢嶋・中嶋 (2002 ; 2004) (3 件法) においてそれぞれ異なる翻訳、異なる回答方式が採用されている。桜井・桜井 (2000) と富重 (2002) では改めて因子分析を行っているが、いずれも対応する 6 因子が確認されている。また富重 (2002) は「理解」、「キャリア」、「自己強化」の項目の平均値が高く、「価値」の平均値が最も低いことを明らかにしている*¹。坂野ら (2002) は確認的因子分析を行い、最終的に 6 因子 2 次モデルを確認している。評定値の平均では、「知識の習得」、「利他主義」、「自尊心の高揚」が高く、特に「利他主義」の結果は富重 (2002) とは異なる。これは富重 (2002) では特定のボラン

*¹ 各因子の平均値を単純に比較することはできないが、回答傾向を確認することはできると考えられる

ティア活動 (超高齢者への談話ボランティア) に対する活動動機 (例えば「自分より幸せでない人が気になるから」) を大学生に質問しているのに対して、坂野ら (2002) では自分自身の信念や感情一般 (例えば「私は、自分よりも恵まれていない人々のことが気になる」) について質問していることによると考えられる。

(2) Cnaan & Goldberg-Glen (1991) の尺度

Cnaan & Goldberg-Glen (1991) はボランティア活動を行う上での考え得る動機を網羅的に挙げた 28 項目について、日常的にボランティア活動を行う人々に調査を行った。その結果、28 項目のうち 22 項目が 1 つの因子に高い因子負荷量を持つことを明らかにした。一方、Trudeau & Devlin (1996) は同じ尺度を、入学後少なくとも 1 回はボランティア活動をしたことがある大学生 124 名に回答させて、「社会的義務」、「経験探し」、「利他的意志」、「個人的動機」の 4 つの動機次元を抽出している (谷田, 2001)。

谷田 (2001) はこの尺度を日本の状況に合うように意識し、1 項目を除いた 27 項目に独自に 5 項目を加えた 32 項目をボランティアサークルに属する大学生 179 名に、ボランティア活動に最初に参加した動機と継続する動機について回答させた。その結果、①サークル活動の一環 (興味ある活動の一環として軽い気持ちで開始)、②利他心 (利他的経験のなかで働いている欲求や感情)、③福祉ボランティア活動の大切さを実感、④民主的社会的理想の実現、⑤不充足感 (寂しく満たされない感情から逃れるため)、⑥周囲の人々の期待、の 6 因子を抽出している。

活動を継続する動機の因子分析でもほぼ対応するような因子を抽出しているが、第 1 因子は「価値ある経験の獲得」、第 6 因子は「就職との関わり」と命名し直している。なお「利他心」に含まれる項目は、「利他的な意志」の他には、「人のためになると気持ちが良い」、「誰かに必要とされたい」、「人助けをすることで自分が楽観的になれる」などであり、純粋に利他的な動機と見なせるかどうかは意見の分かれるところであろう。項目の平均値では、「サークル活動の一環 (継続動機では「価値ある経験の獲得」)」に含まれる、

「ボランティア活動を通して学べる」、「視野の拡大」、「人間関係の発展の機会」といった項目が高く評定されていた。

桜井（2002）もこの尺度を翻訳し、表現を修正した上で、日本の文脈になじまないと判断した1項目を削除した27項目を、ボランティアグループや組織に所属する人に留め置き法によって実施し、287名から回答を得た。因子分析の結果、①自分探し（アイデンティティ形成や自己成長感を求めてボランティア活動を始める）、②利他心（「よりよい社会を作り出す」といった理想や「自分の恵まれている立場の恩返しの意味」といった利他的な動機を含む）、③理想の実現（「自分がやらなければだれもやらないから」、「社会の不公平を変える機会」といった理念を実現したい姿勢）④自己成長と技術習得・発揮（「仕事や将来に役立つ技術や知識や経験を身につけたかったから」など）、⑤レクリエーション（活動自体を楽しむことを望む動機）、⑥社会適応（「以前からこの組織やスタッフと関わりがあったから」など）、⑦テーマや対象への共感（「自分は利用者と同じような境遇で（だったので）、よりよい活動が利用者に対してできると思ったから」の1項目のみ）、の7因子を抽出している。項目の平均値では、「自己成長と技術習得・発揮」、「レクリエーション」、「利他心」が高かった。

（3）山口・高木（1993）の尺度

山口・高木（1993）は自ら作成した15個の動機項目^{*2}を一般学生およびボランティアサークルに所属する人、計213名に実施した。因子分析の結果、ボランティア活動の動機は、①自己啓発的動機、②他者共感的動機、③規範的動機、④功利的動機の4つの動機から構成されるとした。妹尾・高木（2003）は中高年の人にとって重要と考えられる動機の2項目を加えて、現在ボランティア活動をしている中高年の人のうち今後も継続したいと回答した243名（94.5%）に活動継続の動機を回答させた。その結果、①自己志向的動機（知識、技術、経験、余暇といったボランティア自身のリソースの活用を望む項

^{*2}以下の2つの研究では16項目と紹介されている

目や自己の更なる成長を求める項目)、②他者志向的動機 (他者援助を通じての社会貢献を志した項目)、③活動志向的動機 (ボランティア活動そのものを満喫したいとする動機や活動を通して社会との関わりや人間関係の維持、展開を求めた項目) の3つの因子を抽出している。

青山・西川・秋山・中迫ら (2000) は「友人の誘いに応じる」という周囲への同調動機の1項目を加えた尺度を老人福祉施設のボランティア165名に実施して、①自発的動機、②共感的動機、③報酬期待動機、④社会的規範動機、⑤技術・知識の活用動機の5因子を抽出している。ただし因子数だけでなく各因子に含まれる項目が大きく異なる。例えば、青山ら (2000) の「共感的動機」には、「対象者の苦しみがやわらぐ」といった被介護者に対する共感とともに、「自己を再発見し、成長させることができる」といったその共感を通して介護者自身が何かを得るという動機が同じ因子に含まれている。一方、山口・高木 (1993) の「他者共感的動機」に含まれていた「人や社会の役に立てる」という項目は、「規範的動機」の項目 (「人はお互いに助け合わなければならない、自分にもその義務がある」など) と同じ因子 (「社会的規範動機」) を形成していた。ボランティアの特徴や対象によって、その動機の構造が異なる可能性を示唆している。

以下、2つの特定のボランティア活動を対象にして研究を紹介する。

(4) スポーツボランティアの動機

スポーツボランティアは、オリンピックなどビッグイベントで定期的に非日常空間で活動する「イベント・ボランティア」と地域のスポーツ少年団など日常空間で定期的に活動する「コミュニティ・ボランティア」に分けることができる (松本, 1999)。

松本 (1999) は障害者スポーツイベントの大会運営に参加したボランティアに質問紙調査を依頼し、回収した466名の回答を基に参加動機の構造を検討している。64項目の因子分析の結果、①ボランティア (「他の人の役に立ちたいから」といった愛他性とボランティア活動に対する興味、関心、必要性といった活動への積極的な姿勢)、②自己成長 (「自分自身が成長したいか

ら」といった活動者自身の人間的成長を望む動機)、③技術習得・発揮 (参加者自身の技術・技能の習得・発揮や他のボランティアとの交流や出会いの希求)、④レクリエーション (精神的ストレスの解消)、⑤社会参加 (地域の活性化、大会運営への貢献など社会的活動への参加や貢献)、⑥他律参加 (所属団体や友人知人、大会からの勧誘や依頼、義務感による受動的、他律的な活動への参加理由)、⑦報酬 (金銭的、物質的報酬や、他者からの承認など心理的報酬)、⑧参加者交流支援 (参加者 (選手) との交流、共感、支援の希求) の 8 つの因子を抽出している。「参加者交流支援」は、イベント・ボランティアにおいて特徴的な動機である。また本来ボランティアは「自発性」をその特徴としているが、ビッグイベントの場合には、会社ぐるみ、学校ぐるみ、地域ぐるみでボランティア活動に参加することがあるため、「他律参加」のような理由も他のボランティアよりも生じやすいと考えられる。

実際、松本 (1999) は因子得点に基づくクラスター分析によって、「自発的貢献型」(52.8%)、「他律対価型」(23.8%)、「主体的レクリエーション型」(18.7%)、「義務的参加型」(4.7%) の 4 つのグループに類型化している。このように一口に「イベント・ボランティア」と言っても、指向性の異なる活動参加者が同じ場所に集まってきていることを明らかにしている。

この他にも、松岡・小笠原 (2002) はスポーツに関する NPO 法人のボランティア 26 名の動機の自由記述データを、①社交、②学習・経験、③個人的興味、④キャリア、⑤自己陶冶、⑥組織的義務、⑦社会的義務、⑧スポーツの 8 カテゴリーで整理している。田引 (2008) は障害者スポーツを継続的に支える組織に属するコーチや大会ボランティアに郵送法で独自に構成した 30 項目の動機尺度を実施し、373 名の回答を因子分析した結果、①社会貢献、②スポーツ、③自己成長、④個人的興味、⑤参加者支援、⑥報酬、⑦依頼、の 7 つの因子を抽出している。

(5) 災害ボランティアの動機

高木・玉木 (1996) は阪神・淡路大震災をきっかけにボランティア団体に所属した人に参加目的、理由、動機に関する 23 項目の尺度を含むを質問

紙調査を実施している。因子分析の結果、①共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容（「被災者が気の毒に思えたので」、「自分が援助しなければならぬと感じたから」など）、②好ましい援助・被援助経験（「以前にこのような経験をして良い気持ちになった経験があったので」、「今までに誰かに援助されて助かった経験があったので」）、③利得・損失計算（「援助すれば何らかの報酬や返礼が期待できたから」、「援助しないためにこうむる犠牲が大きかったから」など）、④被災地や被災者への好意的態度（「被災地の神戸やここにすんでいる被災者たちが好きだから」、「被災地に知り合いがいたから」など）、⑤援助要請の応諾（「援助するように直接誰かに頼まれたので」、「特にはっきりとした目的もなく」）、⑥良い気分の維持・発展（「援助しようと決心したときに気分が良かったから」など）、⑦被災地との近接性（「自分が被災地の近くに住んでいるので」など）、の7つの因子を抽出している。このなかでも④や⑦の動機は災害ボランティアに固有な動機と考えられる。

(6)その他の尺度を用いた研究

浅川・仲上・古川（1998）は大学生を対象に H.A. マレーによる基本的欲求項目からボランティア活動に関係すると思われる 20 項目を作成し、因子分析の結果、①自己存在の確認、②自己世界の拡大、③援助欲求の充足、の 3 つの因子を抽出している。日下・篠置（1998）はボランティア活動を行っている中高年の人を対象にボランティア活動観に関する 13 項目を作成し、間接的にボランティア活動を行う理由を質問している。因子分析の結果、①余暇、②社会的貢献、③自己実現、の 3 つの因子を抽出している。石本（2004）も自ら作成したボランティア活動開始時（継続時）動機尺度 33 項目を、ボランティア活動経験のある大学生および社会人に実施した。因子分析の結果、①社会貢献、②自己啓発、③将来的利益、④社会的責任、⑤充実願望、⑥友人同調、⑦自己防衛の 7 つの因子を抽出している。

3. ボランティア活動の動機の整理

元来、ボランティア活動はその特徴として「無償性」が挙げられ、自己の

利益に基づかない利他的動機によって行われるものとされたきた。Cnaan & Goldberg-Glen (1991) は自らの尺度の 1 因子性が高いことをその傍証としている。しかし自分に何らかの見返りが期待できるためにボランティア活動に従事するという利己的動機の存在が指摘されて、ボランティア活動の動機を利他的動機と利己的動機に概念的に分類する 2 因子説 (Frisch & Gerrard, 1981; 富重, 2002) や 2 要素モデル (松岡・小笠原, 2002) が一般的となる。「他者志向的動機」と「自己志向的動機」(野上, 1974)、「社会的ボランティア動機」と「個人的ボランティア動機」(長ヶ原ら, 1991)、「愛他的動機」と「個人的動機」(Henderson, 1984)、“other-oriented motives”と“self-oriented motives”(Oda, 1991) といった分類として認められる。

利己的動機がさらに区分され、例えば「実益的動機」と「感情的動機」(Chelladural, 1999)、「余暇」と「自己実現」(日下・篠置, 1998)、「自己世界の拡大」と「自己存在の確認」(浅川ら, 1998)、「自己志向的動機」と「活動志向的動機」(妹尾・高木, 2003) といった区分は、いずれも利他的動機を含めてボランティア動機の 3 要素モデル (松岡・小笠原, 2002) に含まれる。その後の因子分析法を用いた研究は、これまで紹介したとおり、ボランティア活動の動機をさらに細かく分類する「複数動機アプローチ」(桜井, 2002) へと展開している。

ボランティア活動の動機を、桜井 (2002) や松岡・小笠原 (2002) にならってまとめたものが表 1*³ である。尺度研究の因子名とその因子に高い負荷をもつ項目の内容を基に研究相互に関連づけてまとめている。横の並びはおおよそ左側に「利他的」と考えられる動機を、右側に「利己的」と考えられる動機を配置した。相互に関係のある動機は研究によっては 1 つの因子としてまとまるため、隣合っている動機③～⑦の動機は特に内容的に類似していると考えられる。これまでの研究は、①と②は利他的動機、それ以外は利己的動機と捉えてきたが、明確に線引きすることは困難である。

*³ 桜井 (2002) が整理した研究と同じ研究を含むが、因子の関係は必ずしも同じではない

さらにボランティア活動をする個人は、これらの動機のいずれかのみによって行動しているわけではなく、複数の動機を同時に持ちうる。例えば、①に含まれる「困っている人を助けたい」という動機と⑧に含まれる「他者から必要とされる人になりたい」という動機が同時に生起することはむしろ自然なことであろう。よって、因子自体を利己的、利他的と概念的に区別することは可能かもしれないが、各個人のボランティア活動の動機について、ある人は利己的動機に基づいており、別の人は利他的動機に基づいていると区別することは困難であるし、有効な研究のアプローチとは言えない。

このような動機の整理は、「自発性」というもう1つのボランティア活動の特徴についても重要な示唆を与える。表のように、ボランティア活動を行う動機として、③にあるような、身近な人に勧められたり求められて行う行動や、②にあるような「困っている人に対して手をさしのべるのは義務である」といった社会的規範や責任、義務感に基づく行動は、本来「自発的」な行為と呼ばないかもしれない。しかし現実にはこのような動機がボランティア活動を始める際に含まれることはごく普通なことである。複数の動機を保持しているとすれば、やはり各個人の動機について、どの人が自発的でありどの人が自発的でないかを明確に線引きすることはできないであろう。

むしろ、これらの動機が個人のなかでどのように関係づけられているかといった、動機の構造を考えていくことは重要であると考えられる (桜井, 2002)。しかし今回レビューした研究の多くは、ボランティア経験のある人、あるいは大学生一般に対して質問紙調査を実施して因子を抽出するという方法のため、集団全体の平均的な動機の構造が明らかになっても、各個人の各動機の関連づけについて調べることは、クラスター分析による検討を行った松本 (1999) や、PAC 分析を行った渡部 (2010) などを除いてほとんど行われていない。

4. ボランティアの経験による動機の変化

ボランティア活動の動機、あるいは複数の動機間の関連づけが、ボランティ

ア経験に基づいて変化することは考えられる。妹尾・高木 (2003) はボランティア活動がボランティア個人に与える「援助成果」について、面接調査に基づき質問紙を作成し、①「愛他的精神の高揚」(「人や地域に貢献しようという気持ちが生まれた」、「日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった」)、②「人間関係の広がり」(「活動そのものが楽しめた」、「仲の良い友達ができた」)、③「人生への意欲喚起」(「気持ちの充足感が生まれた」、「やりがいが生まれた」)という3つの側面に整理している。また面接調査によっても、看護学生がヘルス・ボランティア活動を通して、自分の考え方の変化や看護に関する学び、ボランティア活動そのものに関する学びを獲得していること(香春ら, 2005)や、中高年女性が自己実現や家庭外役割を獲得することに寄与している事例(大坂, 2008)など、ボランティア活動がボランティア個人にとって肯定的な影響をもたらしていることが確認されている。

それでは活動を継続するなかで、動機自体は変化しているだろうか。大橋・北風・佐々木・宗・宮崎 (2003) は阪神・淡路大震災でボランティア活動に従事した大学生を対象にした調査で、活動を始めた理由とその後の変化を調査している。活動を始めた第1の理由として選択されたのは「被災した人たちの生活の援助に役立ちたいと思った」(36.7%)、「いてもたってもいられなかった」(26.6%)、「自分自身の勉強になると思った」(14.2%)の順で、利他的動機を挙げることが多かった。さらに同様の質問で活動を継続した理由も質問し、開始時と継続の理由をそれぞれ利己的動機と利他的動機に分類し変化を見た。最初の動機として利己的動機を挙げた人の14.1%が継続の動機として利他的動機を挙げており、最初に利他的動機を挙げた人の14.4%が逆に継続の動機として利己的動機を挙げるように変化していた。また活動を通じて最もうれしかったことや良かったことを尋ねたところ、活動の開始の理由として利他的動機を挙げた人でも、「自分自身の勉強になった」(26.4%)や「新しい出会いや経験ができた」(20.9%)といった利己的要素を挙げていた。

谷田 (2001) もボランティア活動開始時の動機と現在継続している動機を同じ項目で質問した。因子分析の結果、「利他心」は開始時の動機では第2

ボランティア活動の動機の検討（伊藤）

表1 ボランティア活動の動機の整理

	①	②	③	④	⑤
坂野ら (2002)	利他主義		社会的 つながり		知識の習得
富重 (2002)	価値		社会的		理解的
谷田 (2001)	利他心	民主的社会的 理想の実現	福祉ボラン ティア活動の 大切さを実感	サークル活動の一環	
桜井 (2002)	利他心	理念の実現	社会適応	レクリエー ション	自己成長と 技術の習得
山口・高木 (1993)	他者共感的 動機	規範的動機		自己啓発的動機	
青山ら (2000)	共感的動機	社会的 規範動機	自発的動機		技術・知識の活 用動機
妹尾・高木 (2003)	他者志向的動機			活動志向的 動機	自己志向的 動機
松本 (1999)	ボランティア	社会参加	他律的参加/ 社会参加	技術習得・ 発揮	
松岡・小笠原 (2002)		社会的義務	組織的義務	社交	学習・経験/ 個人的興味
田引 (2008)	社会貢献		依頼	個人的興味	自己成長
高木・玉木 (1996)	共感と愛他的性格に基づく 援助責任の受容		援助要請への 応諾		
浅川ら (1998)	援助欲求の 充足			自己存在の 確認	自己世界の 拡大
石本 (2004)	社会的貢献	社会的責任	友人同調	充実願望	自己啓発

※はいずれにも対応しない、ボランティア対象に固有の動機を含む

*は「好ましい援助・非援助経験」、「被災地や被災者への好意的態度」、「被災地との近接性」の3つの因子が含まれる

ボランティア活動の動機の検討（伊藤）

⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	※
職業上の成功		自尊心の高揚	感情的安寧		
キャリア		自己強化	防御		
周囲の人々の期待			不充足感		
自己成長と技術の習得			自分探し		
自己啓発的動機		功利的動機			
共感的動機		自発的動機			
	自己志向的動機				
	自己成長		レクリエーション	報酬	参加者 交流支援
キャリア	自己陶冶				スポーツ
	自己成長	報酬	個人的興味	報酬	スポーツ/ 参加者支援
		よい気分の維持・発展		利得・損失 計算	*
自己世界の拡大					
将来的利益	自己啓発		自己防衛		

因子として抽出されたのに対して、継続の動機では第4因子として抽出されたことを指摘し、「利他心」が継続においては相対的に弱い側面となっていると考察している。田引 (2008) はスポーツボランティア活動の経験年数と動機との関連を調べ、経験が長い人が経験のない人と比較して、「社会貢献」の得点が低く、「スポーツ」や「個人的興味」の得点が高いことを明らかにしている。

Oda (1991) はボランティア団体のリーダーもしくはサブリーダーへのインタビューの内容から、最初に他者志向的であった動機が活動を継続するなかで自己志向的に変化する可能性を指摘する。理由としては、ボランティア活動がボランティア自身にとってまさにポジティブなことを与えてくれる経験であること、受け手との支配—被支配的な関係の不協和が「あなたのため」という意識を減らすことが考えられるとする。倉掛・大谷 (2004) は、現在ボランティア活動をしており継続したいと考えている学生や現在していないが活動したいと考えている学生では、「仲間と交流ができる」「自分の喜びになる」といった情緒的報酬や「人脈が広がる」といった連帯的要因がボランティアのイメージとして挙げやすく、「＜自分のため＞ボランティア観」への転換が活動の継続を左右すると考察している。

石本 (2004) は、大学生・社会人ともに、ボランティア開始時は「充実願望」の動機が高いが、活動継続時には低くなり、大学生では「社会的責任」が高くなる傾向、社会人では「自己啓発」、「友人同調」、「自己防衛」といったいわゆる利己的動機が低くなる傾向を見いだしている。桜井 (2002) はボランティア参加の動機と活動歴の長さとの関係を調べ、短い人は「自己成長と技術習得・発揮」の得点が高く、長い人は「理念の実現」や「社会適応」の得点が高いことを明らかにしている。青山ら (2000) も活動歴の短い人は「自発的動機」の得点が高いのに対して、活動歴の長い人は「社会的規範動機」の得点が高いことを明らかにしている。これらの結果は、最初の活動動機の違いによってボランティア活動を継続するかどうかが異なり、利他的動機を保持している人の方が継続しやすいという結果として解釈されているが、活

動を継続していくなかで利己的な動機から利他的な動機へと変化している可能性もあるだろう（田中ら，2007）。

このように動機が開始時と継続時において変化する可能性は示唆されているが、実際のボランティアの経験を積むなかで、利他的動機が顕著になっていくのか、それとも様々な利己的動機が生じてくるのか、については研究結果は一貫していない。あるいはその2つの方向への変化が人によって両方起こりうるかもしれない。しかし多くの研究は回想的な方法によるもので継続的な研究は行われておらず、また個人ごとにその質的な変化を追った研究もほとんど行われていないため、このような動機の変容過程に関する知見が蓄積されることが待たれる。

5. ボランティア活動の動機と達成行動における他者志向的動機の類似性

達成行動における他者志向的動機は、周りの人から応援や実際の援助を受けて、その期待に応えようとして努力するという側面を含んでいる。「恩返し」という表現に表れるように、一種の互惠性に基づいた動機づけである。このような互惠的な動機はボランティア活動の動機としても指摘されている（富川・大東，2004）。

例えば、Cnaan & Goldberg-Glen (1991) を翻訳した桜井 (2002) の項目には、「自分の恵まれている立場の恩返しの意味で」や「活動の利用者に親族や友人がいる（いた）から」が含まれている。園部・恵美須・高橋・鈴木・谷口・水野・岡田 (2008) はボランティアに関する講演に参加した一般市民94名（半数以上がボランティア経験なし）を対象にボランティア活動の魅力を8つの選択肢から複数選択させているが、「これまでお世話になったことの社会への恩返しをしたい」は16名が選択し全体では6番目の回答であった。Oda (1991) は、ボランティア活動の動機について51名中11名 (21.6%) から“Reciprocity”（互惠的）と分類される反応を収集している。これは特に高齢者に対するボランティア活動に従事している人に顕著であった。

田中・兵藤・田中ら (2007) はボランティア活動を「ソーシャルサポート

の交換」という枠組みから捉え直している。高齢者を対象にした市民ボランティア 75 名に「互恵」（「将来自分もお世話になるかもしれないから、出来るときはしたいと思って」）を含む 5 つの参加動機（他は、「社会性」、「役職」、「生きがい」、「援助」）を評定させ、さらに最もよくあてはまるものを 1 つ選ばせた。その結果、「互恵」は「援助」と並んで評定平均値が高く、単項目選択方式では最も多くの人（46.2%）が挙げていた。

大坂（2008）のボランティア活動をしている中高年の面接調査からは、「離れて住んでいる自分の親が他の人の世話になっているので自分が他の人の世話をしたい」という発言や活動継続に重要な影響を与えた自分の母親の言動についての語り（「みんな人のためにするんじゃないかって、返ってくることなんだよって（母親が）言っているのが何となくわかるようになってから、よけいこう、続けられてたんじゃないかしらねえ」）を見ることが出来る。小澤（1998）の有償ボランティアとしてホームヘルパーを行っている人の面接調査でも、参加動機として「自分が介護しているとき、助けてもらったことへの恩返し気持ち」が挙げられている。このようにボランティア活動を行う動機として互恵的な理由が存在することが明らかであるように思われるが、多くの尺度研究では互恵性に基づく動機の項目が含まれていないため、その活動への影響の大きさを他の動機と比較したり、関係を見ることは難しい。

また伊藤（2008）は達成行動に従事するなかで自己志向的動機と他者志向的動機の関係づけが重要であることを主張している。単純に両者を対立的に捉えて、「自分のため」と「周りの人のため」のどちらを重視するかという立場だけでなく、両者の葛藤を調整、統合していく方向性も考えられる。

ボランティア活動の動機においても、先に述べたとおり、利己的動機と利他的動機は明確に区分することはできず、一人のボランティアであってもその両方を同時に保持していると考えられる。その一方でボランティア活動の定義として「無償性」や「自律性」が意識されると、ボランティア個人のなかで「誰のための活動か」、「何のために活動しているか」という問題に対し葛藤が生じることもあるだろう。ボランティア活動に対して謝礼金をもら

うことや「義務感」を感じる事がボランティア活動の継続意志に影響を及ぼしうることが面接調査によって指摘されている（小澤，1998）。ボランティア活動を継続している人にとって、その動機が変容してだけでなく、意識される複数の動機をいかに調整し統合しているのか、その有り様を明らかにする必要性は、達成動機づけ研究と共通している点と考えられる。

ボランティア活動の動機の検討 (伊藤)

引用文献

- 青山美智代・西川正之・秋山 学・中迫勝 (2000). 老人福祉施設における介護ボランティア活動の継続要因に関する研究 大阪教育大学紀要第IV部門: 教育科学, 48, 343-358.
- 浅川潔司・仲上馨子・古川雅文 (1998). 大学生の共感性とボランティア活動の関係 学校教育学研究, 10, 89-93.
- Chelladurai, P. (1999). Human resource management in sport and recreation. Champaign: Human Kinetics. [松岡・小笠原 (2002) に引用]
- 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫 (1991). スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (2) —ボランティアの継続意欲の視点から— 鹿屋体育大学研究紀要, 6, 69-75.
- Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J., & Miene, P. (1998). Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1516-1530.
- Cnaan, R. A., & Goldberg-Glen, R. S. (1991). Measuring motivation to volunteer in human services. *Journal of Applied Behavioral Science*, 27, 269-284.
- Dawkins, R. (1976). *The selfish gene*: New edition. New York: Oxford University Press.
- (ドーキンス, R. 日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二 (訳) (1991) 利己的な遺伝子 紀伊国屋書店)
- Frisch, M. & Gerrard, M. (1981). Natural helping systems: A survey of Red Cross volunteers. *American Journal of Community Psychology*, 9, 567-579.
- Henderson, K. A. Volunteerism as leisure. *Journal of Voluntary Action Research*, 13, 55-56. [松本 (1999) に引用]
- 広崎純子・酒井朗・千葉勝吾・風間愛理 (2006). NPO 活動におけるボランティアの学びと成長: 高校生の進路選択支援活動に携わる学生を事例に お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 113-122.
- 堀洋道 (1991). 思いやりのある人の性格 菊池章夫 (編) 現代のエスプリ 291 思いやりの心理 至文堂
- 石本雄真 (2004). 大学生のボランティア活動の動機 日本青年心理学会第12回大会発表論文集, 40-42.
- 伊藤忠弘 (2004). 達成行動における「他者志向的動機」の役割 帝京大学心理学紀要, 8, 63-89.
- 伊藤忠弘 (2008). 達成行動における他者志向的動機の概念の再検討 学習院大学文学部研究年報, 55, 217-235.
- 伊藤忠弘・平林秀美 (1997). 向社会的行動の発達 井上健治・久保ゆかり (編) 子どもの社会的発達 東京大学出版会
- 香春知永・田代順子・及川郁子・小澤道子・平林優子・菱沼典子・酒井昌子・宮崎紀枝・三橋恭子・森明子 (2005). ヘルス・ボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方 聖路加看護学会誌, 9, 11-18.
- 倉掛比呂美・大谷直史 (2004). 大学生にとってのボランティア活動の意味 鳥取大学教育地域科学部紀要教育・人文科学, 5, 209-227
- 日下菜穂子・篠置昭男 (1998). 中高年者のボランティア活動参加の意義 老年社会科学, 19, 151-159.
- 松本耕二 (1999). スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究—障害者スポーツイベントのボランティアに着目して— 山口県立大学社会福祉学部紀要, 5, 11-19.
- 松岡宏高・小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機 体育の科学, 52, 277-284.
- 野上芳彦 (1974). ボランティア活動入門 白樹社 [松本 (1999) に引用]
- Oda, N. (1991). Motives of volunteer works: Self-and other-oriented motives. *Tohoku Psychologia Folia*, 50, 55-61.
- 大橋健一・北風公基・佐々木正道・宗正諄・宮崎和夫 (2003). 阪神・淡路大震災における大学

- 生のボランティア活動に関する意識と実態 佐々木正道 (編) 大学生とボランティアに関する実証的研究 ミネルヴァ書房
- 大坂紘子 (2008). 高年女性のボランティア開始後のライフコースとネガティブ・イベントへの対処 社会心理学研究, 24, 1-10.
- 小澤千穂子 (1998) 有償ボランティアの参加動機と活動継続意志の維持要因・阻害要因—世田谷ふれあい公社協力員へのケーススタディによる検討— 大妻女子大学紀要家政系, 34, 221-237.
- リチャード・ドーキンス (1991). 利己的な遺伝子 紀伊國屋書店
- Latené, B. & Darley, J. M. (1970). The unresponsive bystander: Why doesn't he help? New York : Appleton-Century-Crofts.
- (ラタネ, B. ダーレー, J. M. 竹村研一・杉崎和子 (訳) (1997). 冷淡な傍観者—思いやりの社会心理学 プレレン出版)
- 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 (2002) 大学生における Volunteer Function Inventory の交差妥当性の検討 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 9, 24-31.
- 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 (2004). 地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性 東京保健科学学会誌, 7, 17-24.
- 桜井政成 (2002). 複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析—京都市域のボランティアを対象とした調査より— ノンプロフィット・レビュー, 2, 111-122.
- 桜井登世子・桜井茂男 (2000). ボランティアの動機についての検討 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 374.
- 妹尾香織・高木修 (2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究, 18, 106-118.
- 柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫 (2004). ボランティア活動の動機における自発性と外発性 龍谷大学国際社会文化研究所紀要, 6, 119-131.
- 園部真美・恵美須文枝・高橋弘子・鈴木享子・谷口千絵・水野千奈津・岡田由香 (2008). 地域住民のボランティア活動に対する意識の実態 日本保健科学学会誌, 10, 233-240.
- 田引俊和 (2008). 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究 医療福祉研究, 4, 98-107.
- 高木修・玉木和歌子 (1996). 阪神・淡路大震災におけるボランティア—災害ボランティアの活動とその経験の影響— 関西大学社会学部紀要, 28, 1-62.
- 竹村和久 (1991). 献血・臓器提供行動と愛他心 菊池章夫 (編) 現代のエスプリ 291 思いやりの心理 至文堂
- 玉木和歌子 (2000). ボランティア活動の動機と成果 西川正之 (編) 援助とサポートの社会心理学 助けあう人間のこころと行動 北大路書房
- 田中共子・兵藤好美・田中宏二 (2007). 「高齢者援助ボランティアにおける活動の動機と効果—ソーシャルサポートの交換の視点を中心に— 文化共生学研究 5, 51-69.
- 谷田勇人 (2001). 福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析 社会福祉学, 41, 83-94.
- 富重貴志 (2002). 学生のボランティア動機に関する探索的研究—超高齢者への談話ボランティアに対する学生の意欲との関連— 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, 7, 43-53.
- 富川拓・大東貢生 (2004). 日本語教育ボランティアにおけるボランティアイメージと動機について 佛大社会学, 29, 51-59.
- Trudeau, K. J., & Devlin, A. S. (1996) . College students and community service: Who, with whom, and wht? *Journal of Applied Social Psychology*, 26, 1867-1888.
- 渡部留美 (2010) 滞日外国人留学生の家族を支えるボランティアの活動動機—PAC 分析による一考察 研究論叢/神戸大学教育学会編, 17, 1-8.
- 山口智子・高木修 (1993). ボランティア動機の構造について 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 224-225.

(心理学科 准教授)